

紹介

羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 10

『古市遺跡群Ⅵ』

本書は、昭和五十九年度に羽曳野市教育委員会が計画・実施した古市遺跡群の発掘調査報告書である。その内容は四つの遺跡調査よりなるが、ここでは特に「高屋城」の部分について紹介したい。

当該部分は、教委側でまとめた七項目にわたる調査報告とそれぞれの専門家が執筆した三項目の特論からなる。

「高屋城について」は、「表7高屋城関係年表」と共に、文献上に現われる高屋城についてコンパクトにまとめている。「従来」の調査成果」は、前年度までの大阪府教委による調査の成果を、土壘・堀・櫓・建物・二の丸と三の丸等にわけて総括している。「調査の契機と経過」は、日を逐って、作業の手順並びに見学者の来訪、見学会の開催等について記し、「調査の概要」では、調査区の全体図を提示している。

「層位・遺構」では、今回調査された八

つのトレンチの内、主に三つについて報告がなされている。建物は計三棟検出されており、二棟は礎石建物、一棟は専貼建物であった。礎石の一つには柱の焼け痕をとどめ、多量の焼土層の存在から考えて、これら礎石建物群が火災に遭ったことを示すとされる。また専貼建物の性格については、他所の発掘事例と比較検討している。この他、柵列や溝・土塋が発掘され、便所として使用されたと思われる埋甕も見出されている。また、一部遺構の上に土壘が築かれていることは、戦乱のなか防備の必要上、繩張りにも変更が加えられたことを示している。

「遺物」、特に「中世の遺物」では、土師器皿、甕、陶磁器、瓦等が詳細に報告されている。その他、焼成をうけた壁土や鉄鏝の存在は、高屋城興亡の歴史を物語るし、銭貨や調度形態の暖房具の発見は、商品経済の発達を示唆する。また、碁石や硯等は当時の生活の一断面を垣間見させてくれる。なお、土師器埴底部に認められた墨書の銘文は、十分に意を解することができないものの、「御屋しき」、「堤」（土壘カ）等の内容を含み、中世の生きた証人として興味深

いものである。

最後に「まとめ」の部分では、従来の報告と今回の調査をあわせて、高屋城の総合的な位置付けを試みている。

特論の一つは、奥田尚氏の「礎石・敷石の岩石種」である。氏は、石材の使用傾向・岩石種を調査した上で、その採取地を推定している。それによると、主に礎石は南河内郡太子町の飛鳥川中流域等、敷石は高屋城東方〇・六キロメートルの石川川原がその採取地として比定されるという。

次に、坪之内徹氏「高屋城跡出土の一五・一六世紀の土器について」がある。氏は、土師器皿、輸入陶磁器（青磁碗・染付磁器・白磁小皿）、国産陶磁器（美濃焼小皿、天目茶碗）、備前焼のそれぞれについて、他地域の出土資料をも参考にしながら、その編年を試みておられる。そして、土器の一定の組み合わせ関係を「城館様式」と称し、文化の下降・拡散現象を仮説として提示されている。

村田修三氏の「高屋城の繩張り」は、その繩張りの基本的な内容について述べた後、当城の独自面に言及している。即ち、台地の北に古市が存在したこと、東高野街道が

城内を縦断していること、築山古墳を利用してのことである。この他、虎口や「櫓台」等についても、氏の長年の研究成果に基づいて非常にレベルの高い考察が加えられている。

以上に見てきたように、本書の「高屋城」の部分は、様々な側面から高屋城を解明し、単なる調査報告書の域を出た優れた著作物であると評価される。しかし、いくつか不満の残る点もある。

その一つは、『撰津高槻城』の報告書〔史料』六八一で小島道裕氏が紹介）がそうであったように、本調査報告が孤立気味なことである。特に細張りや古市との関係等については、他の戦国期城郭（城下町）とのより一層の比較検討がなされるべきであろう。

次に細かい点ではあるが、土塁の断ち割りのトレンチを入れたにもかかわらず、土塁の構造そのものへの言及が殆どなかった点である。筆者は現地説明会の当日、土塁の断ち割り面に明確な版築の跡を見出したし、当日説明にあられた市教委の方もそのことを詳しく説明されていた。城郭という武士の社会生活のための空間の中で、恐

らく労役に駆り出された民衆のものであろう数少ない「いとなみ」の痕跡に触れないのはいかがなものであろうか。

しかし、それらにも増して怒りさえ覚えるのは、本調査で報告された遺構が殆どすべてもはや存在しないことである。これは勿論本書への直接の不満ではないが、敢えてここで一言申し述べておきたい。本書では、「調査の契機と経過」の項の中で、市長や文化庁初め様々な機関の責任者が現場を見学し、現地見学会には何百人もの人々が集まり、各種の団体が保存の要望を声明したことを記した後、ただの二行、「その後、府・市・申請者の三者で協議を行なった結果、土塁をすべて削平して平坦にし、平面の遺構には支障のないように工事を行なうことになった。また、史跡化は実現しなかつた」（傍点筆者）、と述べるのみである。公式の報告書では、或るいは多くを語れなかつたのかもしれない。しかし、大阪府下の平野部では殆ど唯一残る大規模な戦国期城郭遺構、しかもその歴史的重要性において屈指のものである高屋城の遺跡は、この開発破壊によって中心部分の殆どを失ったのである。

開発と保存の問題は一朝一夕には解決できぬ事柄である。だが、本書は、こうして詳細に記録された重要な遺構がもはや地上に存在しない、という点において、この問題に新たな一石を投ずるものとなる。我々としては、行政の怠慢を責めると共に、学術研究や保存運動に対する自らのかわりを敲しく見直してゆく必要がある。

（今谷明「河内高屋城の近況と保存問題」〔『日本歴史』四〇一、一九八一年）参照）
へなお、本書には他に、古市大溝、野中寺、切戸1号墳・2号墳の調査報告も収められている。

（A4版、二〇〇頁、原色図版八頁、
図版二八頁、一九八五年三月、羽曳野
市教育委員会、三〇〇〇頁）

（仁木宏 京都大学大学院生）

中村廣治郎編

『イスラム・思想の営み』

本書は、思想、歴史、社会、文化の面から総合的にイスラムというものをとらえ直してみようとする『講座イスラム』全四巻の第一巻として出版され、主にイスラムの思想的展開を扱ったものである。イスラ